

「タイ・フィールド調査 参加報告書」

京都大学経済学部・3年 長友剛輝

① 学習成果

当初所属するゼミの教授の薦めに従ったままに参加を決めたタイ・フィールド調査であったが、渡航前と後でタイ乃至諸外国に対する認識と日本人である自分自身を見つめる視点が大きく変化したことは大きな収穫であった。もちろん渡航する以前からタイの政治体制が王政であることや、東南アジア経済の中心的役割を担っているという予備知識は頭の中にあった。しかし街中の至る所に飾られている国王の肖像画や東京・大阪と遜色ない程ビル群の乱立するバンコクの景色を目の当たりにして、漠然とした知識が形や色彩を帯びた具体的なものに整理されていくのを感じた。そのように王政を維持しつつ経済発展を遂げているという輝かしい側面の一方で、軍事政権下で反政府的な言論が封殺されていたり経済発展の恩恵からほど遠い国境付近の貧しい人口が存在したりするという厳しい現実もこの調査を通して実際に学習することができた。

また、タイ人から見て我々日本人がどのように映っているのかということも考えさせられる機会が滞在中しばしばあった。バンコク市内の鉄道や空港・道路など多数のインフラ建設に貢献している一方、昼はゴルフに興じ夜は繁華街を練り歩く日本人観光客を実際見ると「日本人らしさ」とは一体何なのかとふと顧みたくなる瞬間があった。

② 海外での経験

幼少期親の仕事の都合によりフィリピン・シンガポールに約6年間滞在していたが、知り合いも当初全くいない状況下で海外に行くという経験はこれが初であった。ましてや日本人学生が他に1人も居らずその当人の英語レベルも果たして怪しいものであった為、日本から出発した時は「もう引き返せない」と正直心に後悔しか無かった。

しかし現地タイでは自分のブローケン・イングリッシュでも意思疎通するには十分であった。タマサート大学ではインドネシアやカンボジアから来た学生とそれぞれの出身国の事情や取るに足らない雑談などを通して、お互いをよりよく理解することができた。

また同行の中国出身の大学院生とは英語だけでなく中国語・漢字を媒介としてコミュニケーションをとることがあった。チェンマイやバンコクの町中でもタイ語の表記とともに中国語で書かれていることが多く（華僑が多いというのも一因かもしれないが）、タイ語又は英語が分からなくとも漢字を見れば大体の意味を掴めたという点で助かる一面もしばしばであった。「国際化＝英語」という固定概念・風潮が日本を占める中で、英語はあくまでも一つのツールでしかなく現実の世界はより複雑かつ多面的に構成されているということを生々と感じ取ることができたのは非常に意義深いと思う。

③ プログラム内容

チェンマイ・タマサート・チュラロンコン大学への訪問と現地大学生との共同研究発表の他に、農場・工場企業・博物館・国連機関への見学など様々なプログラムが盛り込まれていた。その中でも特に印象に残ったのはトウモロコシ製品の加工を行うサン・スイート社とバンコク郊外のワイナリーである。双方ともタイ国内での消費より海外への輸出に比重が占められており、海外市場と密接な繋がりを維持しながら発展しつづけているタイ経済を象徴しているのではないかと思われた。中国や日本と比べて人口も少なく（それでも6千700万人という西欧諸国並みの人口は有しているが）かつ所得水準の格差が著しいタイが経済発展する上で、近隣諸国との貿易関係が及ぼす影響の大きさというものを改めて考えさせられる良い機会であった。

④ 進路への影響

今のところ民間就職や公務員試験でなく大学院進学を念頭に置いているが、この度のフィールド調査を通して海外留学に対する一種の抵抗感やためらいが払拭されたのは非常に良かったと感じている。京大経済の大学院にもイギリス・グラスゴー大学と提携した複数学位制度が存在するという話を伺っているので、機会があれば是非利用することも視野に入れておきたいと思う。